言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

先駆者ザビエルの「見る目」

デ・ルカ・レンゾ
イエズス会司祭

２００６年はザビエル生誕５００周年記念の年に当たります。全世界での行事に合わせて、日本にとって特にザビエルの遺産を再評価・再発見することが期待されます。ここでは、ザビエルが残した遺産の一面について述べたいと思います。

「全世界に行って福音を宣べ伝えなさい」という言葉によって、福音の宣教はキリスト者に欠かせない使命となりました。福音宣教とは、その時点までは別な信仰を持っていた人たちに、「新しい」信仰を受け入れるように働きかけることでもあります。キリストの福音には「他をおいて代わって受け入れるほどの力」が含まれているからこそ、福音宣教が継続しています。福音の力を正しく活かす例として、ザビエルの宣教方法から学びましょう。

洗礼者ヨハネがイエスの到来を知らせて民の心を準備させた重要人物であったように、日本の教会はザビエルの存在を無視することができないでしょう。それはザビエルであるからではなく、歴史を通して働く神がザビエルを選んだからです。その意味においては、ザビエルを「先駆者」と呼ぶこともできるでしょう。ザビエルの日本滞在期間は、日本語を模索しながら宣教したことを考慮すれば、他の宣教師たちよりも日本人と関わる時間が足りなかったでしょう。しかし彼は、世界の人々を驚かせるような成果を上げました。恐らく、日本に対するザビエルの影響はどの宣教師よりも大きかったと言えましょう。

また、ザビエルが依頼したから、多くの宣教師が日本に送られました。ザビエルの日本に対する高い評価によって、多くの外国人が日本に好意を寄せたとも言えましょう。彼が先駆者であったからこそ、特別な恵みが与えられたと思います。神から与えられた使命を識別し、それに従って歩む宣教師の姿を示したことになります。換言すれば、彼を通して神が日本で働いていました。ザビエルが奇跡を起こしたかどうかを議論するより、自分を神に捧げる使徒の本来の姿を見せたことのみを見ても十分に学ぶところがあります。

ここで、先駆者ザビエルの「見る目」の一面を紹介したい。ロヨラの聖イグナチオにこう書き送っています。

日本の地はキリスト教を長く守り続ける信者を〔増やす〕ためにきわめて適した国ですから、〔宣教のために〕どんなに苦労をしても報いられます。それで、あなたが聖なる徳を備えた人物を日本へ派遣してくださるよう、心から望んでおります。なぜなら、インド地方で発見されたすべての国の中で、日本人だけがきわめて困難な状況のもとでも、信仰を長く持続してゆくことができる国民だからです。

（『ザビエル全書簡』５５４ページ）

これを見れば、ザビエルが２５０年間の迫害を耐えながら信仰を守った日本の教会を見事に見抜いていたことが分かります。この箇所は、彼の人間的な知識ではなく、恵みとして与えられた知識を示しています。

先駆者であったザビエルがこの箇所に残したメッセージをまとめてみたいと思います。

①ザビエルは、個人や民族を外面から評価せず、人の心を感じ取っていた。隣人を大事にする、人の心を敏感に受け取る心を持っていた。

②個人・民族を知ることは、データ収集ではなく、言語を越えた心の対話であり、言葉が通じなくても相手を自分と同じレベルに置いて関わることである。

③ザビエルには日本人の欠点も見えたはずなのに、その「良い面」だけを見て評価した。

この３点は現代人の「落とし穴」でもありますので、今年を、ザビエルと特に深い関わりをもった日本の聖人たちが残した手紙などをその観点から読んで学ぶ年にするならば、心の刷新にもつながるでしょう。

Q&A…ザビエルの「見る目」

Q．「宣教年間」と呼ばれる今年の行事のうち、ザビエルの「生誕500年」を記念するもののほうは準備が進んでいるそうですが、肝心の時代に合った「宣教視点の見直し」のほうも実施されているのでしょうか。

A．1549年にザビエルが鹿児島に上陸されたときから日本のキリスト教宣教の歴史が始まった、ということはご存知のとおりです。

彼の生誕500年という節目にあたって「過去を振り返りつつ未来に責任を持つ」ためには、単なる一過性の行事を消化して終わり、という形で片づけてはならないはずです。現代に生かすべき宣教視点とは何なのかを、じっくりと探ってみる必要があります。

ザビエルは、わずか2年2ヵ月しか日本に滞在しませんでした。しかし、その日本を見る目には確かなものがあったようです。

第一面でレンゾ師が述べておられるザビエルの「視点」には、植民地支配主義が猛威を振るい、教会内にも非常に攻撃性の強い雰囲気があった当時の時代背景を考えると、特筆すべきものがあります。まさに現代の宣教方法を考える際の非常に大きなポイントであり、「落とし穴」にもなる点であるような気がします。

Q．その「落とし穴」とは何ですか。具体的に教えてください。

A．レンゾ師はこのことばを使って、現代の宣教に欠けていると思える、次の3点を挙げておられます。

①人や民族を外面から評価するのではなく、具体的な「日本人そのもの」の「心」を感じ取ること。

②宣教する相手のことを知るためには、単なるデーター集めではなく、言語を越えた「心の対話」を重視し、言葉が通じないハンディを乗り越えて、相手と同じ目線でかかわること。

③たとえ相手の欠点が目についても、その良い面だけを見るように努めること。

Q．日本、とくに長崎においては、まだまだ攻撃性の強い「相手征服型」の宣教方式が続けられているのではないでしょうか。

A．もしそうなら、ますます先駆者ザビエルの「視点」に学ぶ必要があるのではないでしょうか。

ザビエルのいわば時代を超えた視点の転換は、おそらくマラッカで初めて日本人のアンジロウに出会ったときから始まっただろう、と推測されます。なぜなら、そこで彼が上長にしたためた次のような趣旨の手紙が残っているからです。

「私はアンジロウに、もし自分がいっしょに日本へ行けば、その国の人々はキリスト教徒になるだろうかと尋ねました。アンジロウは、自分の国では聞いたことをすぐ受け入れるわけではない、と答えました。彼の話のとおりだとすると、向こうでは、私が説教する宗教についてまずだれもが最初にいろいろな質問をするでしょう。そして、特に私の言葉と行いがどこまで合っているかを調べるでしょう。その質問に対して満足のいく回答が出て、私が立派な生活をしていて非の打ちどころがなければ、王と貴族と大人はみな、確実にキリストの群れに加わるにちがいありませ

ん。彼らは理性の導きに従う国民ですから。」（1548年1月20日付手紙）

Q．ザビエルはわずか2年2ヵ月ほどしか日本に滞在していないのに、しかも日本語もほとんど話せなかったはずなのに、どうして大きな成果をあげることができたのでしょうか。

A．そこが大きな謎というより、奇跡ともいうべきところです。しかも彼が植えつけた信仰は、250年にも及ぶ迫害にも耐えて生き残りました。

ですから、宣教の成否はことばの巧みさでもなく、教義を勉強する期間によるのでもない、とは言えるのではないでしょうか。まさに一面でレンゾ師が述べておられるように、言語を越えた心の対話、言葉が通じなくても相手と同じ目線で接するということが、大きな要素になると思われます。

それでも結局は、ザビエルの謎は完全に解けるわけではありません。後世の人がこうだったのだろうと推測するしかないのです。ザビエルという人間全体がかもし出す、何者も否定できない神の気配がそうなさしめた、と言うしかないのでしょう。

Q．平戸では、わずか2ヵ月ほどの滞在中に100名ほどの受洗者があったと伝えられているように、多くの信徒が生まれています。時代が違うとはいえ、現在の日本ではどうして受洗者が増えないのでしょうか。

A．この問題に対しても、確答はありません。ただ、前述のようなザビエルの「見る目」に何らかのヒントがある、とも言えるでしょう。

受洗者の数ということで言えば、負け惜しみでもなく、単なる正当化でもなく、今こそ目に見えない数を「見る見方」を身につける必要があるのではないでしょうか。

それは、「匿名の信者」というとらえ方です。洗礼台帳に記されてはいないが、神さまの前にはりっぱな信者がいる、という見方です。そしてそれは、逆の見方も暗示してくれます。洗礼台帳に記されてはいるが、実際には信者ではない、という見方です。

洗礼を受けると、確かに神の国に入ることができるようになるでしょう。しかし、福音書はそこに一つの「落とし穴」があることも教えています。「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」（マルコ10・31）のだと。

Q．ザビエルが指摘する視点を実生活で生かしているかどうかはもちろん大切ですが、洗礼による神さまのいのちの授与、という視点も必要なのではないでしょうか。

A．日本の司教団が今世紀のテーマとして出された「いのちへのまなざし」と洗礼による「神のいのちの授与」とが結びつけられるための、より深い考察が必要となるでしょう。

ザビエルの視点として、人間の欠点ではなく良い面を評価する方法をレンゾ師が紹介しておられますが、私たちのいのちをキリストへと高揚させる秘策は、ここにあるような気がします。

単なるお世辞ではなく、その人の中に光るものを見つける行為は、「あなたがたは世の光である」（マタイ5・14）というみ言葉が真理である以上、最優先して取り組まれるべきことです。だれもが持つ神の光を見つけ、これを最大限に評価し、その存在を高らかに宣言すること、これこそが宣教行為そのものだからです。

こうした宣教の視点において、私たちキリスト信者は、ずば抜けた独自性を発揮すべきなのではないでしょうか。かつての「アナテマ（破門）」癖がいまだに抜け切らず、他を非難し、足を引っ張り合うことのみに明け暮れているとすれば、匿名の信者の方々に先を越されている、ということになってしまいます。

宣教は、名目上はカトリック信者ではない方々も含めた「全人類に課せられた責務」（使徒的勧告「福音宣教」1）なのですから、この長崎においても、すべての善意の人々と手を取り合って宣教に励む、という視点を身につける必要があるのではないでしょうか。

「参加する教会」をめざして（5）

「参加」を促す聖霊の恵み

今回は、「参加する教会」についての理解を深めるためのもう一つの要素となる、「『参加』を促す聖霊の恵み」という側面を考えてみたいと思います。

1. 班集会を導く聖霊の恵み

A小教区の信徒たちは、大きな喜びと期待のうちに胸をふくらませていました。新しい主任司祭がやって来たのです！　そしてその神父にとっては、そこが主任司祭としての初めての任地でした。

うまく司牧していけるのだろうかと一抹の不安を抱えていましたが、まずは司教様の方針である「参加する教会」をこの小教区で実現させたい、と考えていました。そして、信徒全員が教会活動に参加し、それに責任を持つようになってほしい、と願っていました。

その新しい主任司祭は、小教区内のいくつかの班集会では「み言葉の分かち合い」をしていることを評議会役員から知らされ、たいへん喜びました。そしてすぐに、その中の一つを訪問することにしました。

集会の場に主任司祭が到着し、人々とあいさつを交わして席につくと、いつものとおりの「分かち合い」が始まりました。主任司祭も主における同じ兄弟・姉妹として、みんなと同じ立場で分かち合いに参加しました。

第6段階に入ったところで、進行係が主任司祭に、「神父様は着任のあいさつで『参加する教会』をつくりたいとおっしゃいましたが、私たちの地区に対して何か期待されることがおありですか」と尋ねました。すると主任司祭は、「もしもまだ担当が決まっていないようでしたら、次の聖霊降臨の日のミサの典礼を、あなたがたの班の皆さんに準備していただけたらありがたいのですが、できるかどうかみんなで話し合ってくださいませんか」と切り出しました。そしてその申し出を受けて、次のような意見交換がなされました。

A「今までしたことがないので、どのように手をつけたらいいのか不安ですが、思い切ってやってみましょうよ。」

B「まずは、第一朗読と第二朗読は誰が担当すればよいかを考えてみましょう。」

C「山田さん夫妻に一つずつ担当していただく、というのはどうでしょうか。」

D「答唱詩篇のところは子どもたちにやってもらったらどうですか。幸い鈴木さんは聖歌隊員ですし、練習をお願いしましょうよ。また、彼らの中にはオルガンを弾ける子どももいます。」

E「ご年配の方や若い人たちには、共同祈願のところを頼んでもいいでしょう。」

F「日本人以外の信徒たちにも共同祈願をお願いする、というのはどうでしょうか。さまざまな国の人々がお互いを理解し合えるようになった、最初の聖霊降臨の日のようになるのではないでしょうか。」

G「私は朗読したり歌ったりすることはできませんが、奉納ならばできそうです。子どもたちも入れてもいいですよね。」

新しい主任司祭は着任にあたって、信徒たちの協力が得られるかどうか心配していましたが、この班集会に参加してみてそれが杞憂

であったことが分かり、「参加する教会づくり」が可能であることに自信を深めました。「み言葉の分かち合い」をスタートさせてくださった前任の主任司祭に感謝しながら、これからの主任司祭としての仕事に、喜びと誇りを感じることができました。

この班集会に参加した人たちは、「み言葉の分かち合い」を行いながら、自分たちでは気づかないうちに、共に聖霊の望みに従おうとしていたのです。そしてその聖霊は、ご自分の望みに従おうとする者たちには、あふれるほどの豊かな恵みをお与えになるのです。

2. 各自に与えられた聖霊の恵み

すべての人には、「タレント」とも呼ばれるその人固有の能力ないし才能などが与えられています。そして私たちは、それら天与のものと個人で獲得した特技などとを合わせ、その人が持っているあらゆる特性を総称して、「個性」と呼んだりしています。

一人ひとりの人間の特性は、天与のものはもちろん、自己の努力によって獲得したものであっても、すべて創造主である神の恵みによって与えられたものです。そしてその神は、洗礼と堅信の秘跡を受けて心身ともに聖霊の神殿とさせていただいたキリスト者には、それを「聖霊の恵み」として受けとめさせながら、より豊かな恵みを与え続けておられます。

その聖霊の恵みは、一人ひとりのキリスト者に違った形で与えられています。私たちが神から与えられているカリスマや霊的なたまものは、千差万別です。使徒パウロは、宣教するたまもの、預言するたまもの、教えるたまもの、奇跡を行うたまもの、病気をいやすたまもの、援助するたまもの、管理するたまもの、異言を語るたまもの、などについて述べています（Ⅰコリ12・28参照）が、そのように特殊なものではなくても、私たち一人ひとりの「長所」と呼ばれているさまざまな特性が、神の恵みであり、聖霊から与えられている特別なたまものなのです。

それらのたまものは何のために与えられており、それを私たちは現在どのように用いているのでしょうか。特別に「聖霊のたまもの」と呼ばれているものも含めたそれらの聖霊の恵みは、キリストご自身の使命を継続・推進するために、キリスト者一人ひとりに与えられているのです。

私たちはそれらの恵みを、キリストが望まれる神のみ国建設のために活用する必要があります。具体的には、各自が所属する班での活動を推進させるため、小教区の諸活動の中で自分にもできる部分を担当するため、地域活動の輪を広げるため、人によっては市民レベルや国民レベルの活動を活性化させるためにも用いることができるのではないでしょうか。

3. 聖霊の恵みの活かしかた

私たちは、自分がいただいている固有のタレントないし聖霊のたまものをどのように活用しているのでしょうか。その使い方には、人によって大きな相違が見られるようです。

①ある人は、聖霊の恵みは自分のために与えられたものだと考えており、自分のためだけにしか用いていません。

②ある人は、自分に聖霊の恵みが与えられているとは意識していないので、それを他の人のために使うことなど考えてもいません。

③ある人は、自分に与えられている聖霊の恵みを活用するのを怖がっています。だから、いつも他の人が何かを始めてくれるのを待っています。

④ある人は、自分に与えられている聖霊の恵みを使いたいとは思っているのですが、公的機関とか文化的タブー、あるいは周りの偏見などに妨げられて、それを使えないでいます。

では自分の場合はどうなのかを各自で反省してみたうえで、家庭内の対話の中で、あるいは自分が所属しているグループや班集会での分かち合いの中で、自分たちの家族やグループ（班）としてはどうなのか、について話し合ってみてはどうでしょうか。きっと聖霊ご自身が良い知恵を授けてくれるにちがいありません。

日本の教会の現状、課題、展望（1）

溝部　脩　高松教区司教

この稿は、昨年11月に開催された長崎地区「信徒の集い」において、「日本教会の現状、課題、展望」というテーマで行われた溝部司教様の講演を、ご本人の了承を得てテープ起こしし たものです。

数回に分けてこの蘭でご紹介させていただく予定ですが、今回はその中の初めの二つの項目を取り上げることにいたしました。

1．問題提起
2．ポストモダンの時代
3．キリシタン時代よりの考察
①「ナツーラ（自然）」に即した生き方が人間の生活の基本
②不自然の教えを強調するキリスト教は受け入れられない
③自然の理による倫理的に正しい人は圧倒的に多い
④教会の適応への批判
4．現代的考察
①世俗主義
②自然教の問題点
5．国体との関係
6．明治政府の宗教の定義
7．日本の教会の大きな潮流
①社会への挑戦
②霊性を深める
③組織化に向かう
8．長崎教区が果たす役割

今日は、「日本教会の現状・課題・展望」というテーマで話をさせていただきます。

先日、70歳の検診ということで、高松市の病院に行きました。30項目の検査のうち引っかかるものはなく、健康そのものだということでした。三つだけ気がかりな点があるが、そのうちの一つは肥満だ、ということでした。

後でお医者さんとの面接がありまして、あなたは70歳にしてはすごく健康だ、肌のつやも良く、すべてよろしい。よほど、ゆったりとした余生を送っているのでしょうね、と言われまして、それはちょっと違うのではないかな、と思いました。というのは、60歳から70歳までの10年間に私は4回転任しております。東京から長崎へ、長崎から仙台へ、仙台から四国へと、西や東を行ったり来たりした10年間でして、お医者さんが言われるような、ゆったりとした余生を送っているわけでは決してない、と思っています。

ただ、そういう中でいろんな教会の姿を見ることができたな、とは思っております。

また、いろんな意味で、教会とは何か、ということを分からせていただいているように思います。そういうことも踏まえて、皆さんと短い時間でも分かち合いができたら嬉しい、と思っています。

1．問題提起

最近、こんなことを耳にしたりします。

一神教の宗教を持つ国同士が、現在戦争をしている。キリスト教国のアメリカが、キリスト教という教えに動かされて、イスラム教国に戦争をしかけている。そして、その戦争を受けて立つ国の宗教であるイスラム教も一神教である、というのです。中近東で争いが起こっているのはユダヤ教が一神教だからだ、とも言われます。キリスト教とかユダヤ教とかイスラム教などがあるところには戦争が起こるのであって、多神教でいろんな神さまを認める日本のような国は平和であり戦争がない、と自慢しています。しかし、本当にそうでしょうか。

では、本当の一神教やキリスト教とは、一体どういうものなのでしょう。先ほど言われていたようなキリスト教とか教会などが、日本人に受け入れてもらえるのでしょうか。大きな問題提起です。

今年の4月、私がちょうどローマにいたときに、教皇ヨハネ・パウロ二世が亡くなられました。そして、その葬儀にも与ってまいりました。葬儀の前のローマの状態も、肌身で分かったつもりです。

葬儀の時の説教は、現在の教皇ベネディクト16世でした。その時はラッチンガー枢機卿であった彼が話された内容は、現代は混沌としている世界で、相対主義の社会である。これもいい、あれもいい、ということで、何でも許容している社会、これが現代である。そういう社会にキリスト教徒の私たちはどのように食い込んでいくのか、どのように挑戦していくのか、これが一番大きな問題である、というものでした。

さらに、今年の8月にドイツのケルンで開催された「世界青年の

集まり」の中でも、その教皇様は同じ内容のことを述べられました。「現代とは底なし沼のようなものであり、そこに入ってしまえば、ずるずると沈み込んでいく世界が広がり、何が本当の価値であるのかも分からなくなってしまう時代である」と述べられました。

数年前にドン・ボスコ社から、『信仰とは』という本が出されました。これは、今の教皇様が教理聖省の長官であったときに、メッソーリというイタリアのジャーナリストが彼と対談をして、その様子を一冊の本にまとめたものです。もう絶版になっているかと思いますが、ぜひお読みになっていただけたらと思います。その中で、メッソーリ氏が「現代とはなんですか？」という質問をしていますが、ラッチンガー枢機卿は、現代とは「相対主義の時代である」という返事をしておられます。

そして、現代は、同じジーパンをはいて、男も女も長い髪の毛をしていて、後ろから見ると男か女か分からない、そういう時代だ、と面白いたとえも用いておられます。

先生と生徒の区別がつかない時代、お母さんと娘がいても、どちらがお母さんか娘かが分からないような時代であり、友だちのようなお父さんが理想的なお父さんであり、共同体を作っても、皆で話し合い、全員のコンセンサスがないと何も決めてはいけない、と考える時代。これが現代である、とも述べておられます。

非常に面白い表現だと思いますが、こういう現代に生きる私たちは、どういうふうに考え、どのように生きたらよいのでしょうか。

これらのことを、今日の私の話の前提にさせていただきたいと思います。

2．ポストモダンの時代

こういう時代のことを、「ポストモダンの時代」と呼びます。だいたい、ここ20年の間をポストモダンの時代と呼んでいるようです。

それ以前の時代は「ニューエイジの時代」といわれており、ニューエイジ、ポストモダンの時代というふうに続きます。教会もニューエイジ、ポストモダンという時代の波に翻弄されているようです。

私たちの教会には青年が来ないとか、青年が教会離れをしてしまったとか、いろんな話がなされていますが、その底流にあるものを深く探っていきますと、現代という社会がどんなものか、ということに私たちが気づいていない、というところに原因があるようです。

問題となるのは、先ほど申し上げた「相対主義」です。あれもいい、これもいい。だから、「これだ」というものがないのですね。これだというものを出したら、やれ一神教だ、やれ戦争を起こす宗教である、などと真剣に考えるのです。戦争を起こさないためには、あれでもいい、どうでもいい、なんでもいい、ということが大切だ、と考えられているようです。私たちが生きている時代は何でもいい時代になってしまった、ということです。絶対とか権威などという考えは許さない、そういう時代に私たちは生きていることになります。

遠藤周作という作家がいますが、彼は「日本という社会は底なし沼なんだ」と言っています。そこに入ったら出られない社会、これだというものを持つキリスト教などは受け入れられない社会、だというのです。

教育も、何でも許す倫理観とか、平等主義とかが大勢を占めています。校長先生にも権威がない。校長も、先生たちと一緒に職員会議ですべてを図り、合意がないと何もできません。校長が一人でやったらおっぽり出され、受け入れられないのです。そんな時代なのです。

民主主義絶対、の政治の時代です。教会の中でも同じことが起こっています。今までは司教とか司祭が権威を持っていたかもしれません。しかし、現代の教会には権威というものに対するアレルギーがあります。そんな中では、秩序とか、組織とか、教義などというものを、どういうふうに考えたらよいのでしょう。

そういう中でも、現代の教会には宣教する務めがあるのです。では、どうすればいいのでしょう。

青年が来ない、来ない、と言っていたって、しょうがないわけですね。彼らは、教会に行っても行かなくてもいい、教会で結婚してもしなくてもいい、子どもを産んでも産まなくてもいい、そういう現代の価値観の中で生きているのです。教会がいくら教会に来なければいけないなどと言っても、納得しないのです。そういう社会に生きる人々に、私たちは何を伝えたらいいのでしょうか。これが、現在の教会の一番大きな課題だと思います。

聖書豆知識

聖書は何語で書かれたの？

私たちは、聖書をいつも日本語で読んでいます。またたくさんの言葉があることも知っています。聖書がもともと日本語で書かれたとは思っていませんが、では一体何語で書かれたのでしょうか。

そのとおり、日本語ではありません。私たち日本人は、日々の聖書朗読も、またミサの中での聖書の朗読も日本語で行っています。同様に、他の言葉を話す人たちにとっても、自分たちの言葉の聖書が必要です。そこで「翻訳」という作業を通して、聖書を日本語にしたり他の言葉に訳したりして、誰もが自分たちの言葉で読めるようにしたのです。

皆さんもご存知のように、聖書は「旧約聖書」と「新約聖書」に分けられます。そして、それぞれが異なる原語を持っています。旧約が主にヘブライ語、新約がギリシア語で書かれました。ヘブライ語というのは、セム語族の一つの言葉です。この「セム」の語源は、創世記10章に出てくるノアの子セムに由来すると言われています。またその兄弟ハムもハム語という語族の起源になっていて、両方を合わせてセム・ハム語族を形成しています。

今日でもユダヤ人はヘブライ語を話していますが、本来言葉というのは時代とともに変化していくもので、もし今日のヘブライ語を現代ヘブライ語と呼ぶならば、聖書のヘブライ語は「古代ヘブライ語」といえるでしょう。つまり古い時代のヘブライ語なのです。

先ほど「主に…」と言いましたが、実は本来のヘブライ語のほかにもう二つの言語があるのです。一つはヘブライ語によく似た**「アラマイ語」**という言葉です。イエス様たちはこの言葉で日常会話を交わしていました。しかし、多くがこの言葉で書かれているのではなく、旧約の中の四書（エゼキエル、ダニエル、エレミヤ、創世記）のごくわずかの部分に存在するだけです。それから、原典が本当にそうだったのかどうかは分かりませんが、いくつかの書は古いギリシア語で伝えられたものしか残っていないので、**ギリシア語**で書かれたであろうといわれているものもあります。ですから、**旧約の大部分が「ヘブライ語を中心にまとめられている」ということになります。**

次に、新約聖書の言葉について少しご説明いたしましょう。新約が書かれた言葉であるギリシア語も、ヘブライ語と同様に、ギリシアの国で今日使われている言語です。しかしながら現代のギリシア語を聞いていると、発音の仕方が以前とはかなり異なっているように思えます。当然と言えば当然です。しかし不思議なことに、今のギリシア人たちは、新約聖書のギリシア語を聞いたり読んだりしても、半分ぐらいは分かると言います。だから、時代の推移にもかかわらず、今日のギリシア語に新約のギリシア語がかなり残っているということになるでしょう。

話を戻しますが、**一口にギリシア語といっても、**インド・ヨーロッパ語族に属する（ヘブライ語がセム語に属するように）言語で、幾つかの方言を持っていました。しかし時代の流れの中で方言が統一され、全ギリシアの標準語が生まれてきます。そのギリシア語は「コイネー」と呼ばれ、「共通語」を意味しています。このコイネーこそが、新約聖書が書かれたギリシア語なのです。

新約をこの言葉（原文）で読んでみると、同じコイネーでもそれぞれの書の著者によって特徴が現れてきますが、ちなみに読みやすいと思うのは、ヨハネが書いたものです。しかし彼のメッセージは非常に難しく、説教をする司祭にとってはまさに「司祭泣かせ」です。「簡単に読めるけれども、難しい」というのは、何か奇異な感じがします。また逆に、読み辛いというのはパウロの書簡で、彼が書いている内容も彼の考えそのものを理解するのも容易ではありません。

（湯浅　俊治）

Catholic Archdiocese
NAGASAKI

心に残る二つの話

現代の社会は国内外を問わず、いろいろな出来事が次々と起こり激しく変化するので、目まぐるしくてとてもついて行けないといった感じである。以前は10年一昔と言われたが、今では５年一昔とか３年一昔とでも言いたくなるほどである。

このように変化の激しい社会では先の見通しが立たず、頭が混乱して、どう解決すればよいか迷うことがある。

市街地に出て、電車やバスに乗ったり、街を歩いたりして最近特に感じることは、みんな疲れた様子で目に輝きがなく、顔にも生彩がないことである。先日あるテレビ番組で、「あなたは疲れていると感じますか」という質問が、都市部の街頭で行われていた。それに対して、なんと70パーセント近くの人が、「疲れている」と答えていたのである。これを見て私は、「考えていたとおりだなぁ」と、思わずうなずいてしまった。

学校を卒業しても定職に就かず、勤労意欲もなく気ままに過ごす若者が増加している。これも激変する社会情勢に対応できず、自信を消失して希望が持てなくなったためではないか、と思う。また最近、ノイローゼやうつ病になる人が増えているとも聞く。

このように複雑で厳しい社会にあって、先の見通しが立たずに迷った時、私はよく、次の二つの話を思い出す。

(1)

松本幸之助の「人生談義」という著書に、二宮尊徳翁の例え話として、次のようなことが記されている。

田舎から二人の若者が、花のお江戸に仕事を求めてやって来た。すると、街角で一杯の水を売っている人がいた。二人はそれを見て驚いた。そしてその一人は、なんと江戸では一杯の水さえ金を払わないと手に入らないのか。このような所ではとうてい住み続けることはできない、と気を落として帰ってしまう。もう一人は、これはおもしろい、江戸では一杯の水を売ってさえ商売ができるのか。知恵を働かせれば商売の道は無限だな、と胸を躍らせて江戸に残り、成功したというのである。

一杯の水を売っていたという事実は一つでも、その受けとめ方が違っている。悲観的な見方は心がしぼみ絶望へと通じるが、楽観的なプラス思考の見方は心が躍動し、様々な知恵や才覚が湧いてくる。

(2)

アトランタのオリンピック大会。女子マラソン競技は接戦が続き、とても盛り上がった。私はテレビにくぎづけになって応援した。マラソンは、42.195キロメートルを走りぬく、とても過酷な競技である。私はマラソンレースを見るたびに、選手たちはあの長い距離を走りながら何を考えているのだろうか、と思っていた。ところが、ちょうど私が尋ねてみたいと思うことを、アナウンサーが入賞した３人の選手に質問してくれた。そしてその３選手は、自分の気持ちを語ってくれた。

第３位の日本の有森選手は、「ここでやめたら、これまで頑張ってきたことが水の泡になる。自分との闘いだ、と思ってがまんした。」

２位のロシアのエゴノア選手は、「国の名誉のためだと思い、一生懸命に走った。」

１位のエチオピアのロバ選手は、「神さまにもらった力を全部出しきって走った。きっと、神さまが守ってくださると思い、神さまと共に走った。」

私は、それぞれのお国柄・人柄がよく表れていておもしろい、と思った。それと同時に、ロバ選手の強い信仰心に感動した。そしてロバ選手がどんな時でも常に神さまを信頼して、神さまと心の会話をしながら歩いていることに感服し、私もぜひ見倣いたいと思った。

厳しい現代社会で生きていくために、ものごとをプラス思考でとらえ、常に神さまと共に歩みながら、心豊かに希望を持ち続けていきたい。

村岡正則（むらおか　まさのり）

巡礼者

今年の２６聖人殉教記念ミサに、インターネットの、あるホームページを通して知り合った方たちが、それぞれが違った思いを抱き、東京、名古屋、京都から集まり、ミサに与っておられた。

この５人の巡礼者に、長崎へ行ってみようと思った動機や、巡礼を終えた感想などを伺ってみた。

◇私は昨年の10月に洗礼を受けました。そこで、カトリックの信仰が熱い長崎へ行ってみたいと思いました。ある方に、長崎へ行くには何時がいいですかと尋ねると、26聖人殉教ミサがある2月がいいですよ、と言われ実現しました。この旅をするに当たり、私は神さまに2つの願いをしていました。一つは「ほんの少しでも信仰の目を開かせてください」ということ、もう一つは「殉教とはどういうことでしょうか、教えてください」ということでした。

大村に到着すると、いきなり大村の殉教地を回りました。私が首塚で、「あぁ、この下にたくさんのお骨があると思うと、踏めませんね。」と言うと、案内者の方が、「何を言っているの、どんどん踏みなさいよ。よく来たね、どんどん踏んで行っていいよ、って笑ってるよ！」と、おっしゃったんです。その時、「あ！」と感じました。この人たちはとっても嬉しかったんだ。キリストと痛みをともにして、本当に嬉しかったんだと。これは最高の賛美という気がしたのです。そこには変な悲壮感もなく、神を見た人だけが感じる本当の喜びに満ち満ちていたと思ったのです。

◇私は昨年のクリスマスに洗礼の恵みをいただきました。神と出会って今までの生き方ではいけないとの呼びかけがあり、これから先の困難が目に見えているのですが、新しい生き方をしようと決心しました。そこで、この殉教者のミサに与り、力をいただきたかったのです。主人は非カトリック者ですが、賛成してくれて、ミサにも一緒に与ってくれました。

◇私は今、教会でカトリックの勉強をしています。長崎は修学旅行で来たことがありますが、もう一度訪ねたいと思っていたので、今回の旅に踏み切りました。宿泊したカトリック・センターは、浦上教会のアンゼラスの鐘の音が聞こえたのが最高でした。2泊3日の滞在中、3回のミサに与ることができました。26聖人のミサでは、ルドビコさまの歌に途中で胸が詰まって歌えなくなりました。また、浦上教会の朝のミサでは、早朝から大勢の方が来ておられることに驚くと同時に、美しい聖歌と祈りに満ちたミサが毎日続けられていることに心を打たれました。

◇私は幼児洗礼ですが、一時期教会から離れていました。そんな私を再度この道に連れ戻してくれたのが、昨年10月に受洗した妻であり、このインターネットの仲間の祈りだったのです。今回の旅の中で、さまざまな体験をしましたが、やはり、一番の体験は26聖人のミサであるといえます。強い日差しの中で行われた野外ミサに何とも言えない解放感を覚え、大勢の神父さま方による開祭の儀に圧倒され、一週間後に叙階式を迎えるという若い助祭様の気合いの入った福音朗読に、「長崎魂」というか何とも表現しがたい伝統のようなものを感じました。また、聖歌一曲一曲ごとに参列者がかもし出すハーモニーに凄いエネルギーと一体感を覚え、私も初耳の聖歌にもかかわらず、気づけば周りの迷惑も顧みず大声で歌っていたのです。

◇信者でない私が場違いではないかと思いつつも、西坂のミサに参加し、また、聖職者の方とお話しする機会も与えられました。言葉でうまく言い表すのは難しいですが、圧倒的な祈りの雰囲気、そして、神に生涯を捧げた方の穏やかな表情が印象的でした。

私は信仰のことはよく分かりません。しかし、信仰を持つのは素晴らしいことだと思うようになりました。

この巡礼に参加された京都の方は、3月5日、このちょうど一カ月後に洗礼志願式に与られ、信仰への道を歩み始められたということです。長崎に蒔かれた種は、他のところでも実っています。神に感謝！

召命委員会より…

改革進む 日本の神学校

編集部より、右記のようなテーマをいただきました。少し過激な印象を受けるタイトルですが、そのまま使用させていただくことにします。

日本の司教団は、2005年6月の司教総会において、東京カトリック神学院と福岡サン・スルピス大神学院の両神学院を合同することを決定しました。しかし、どちらかを閉鎖してどちらかに合併するのではなく、両校のキャンパスはそのまま神学院として使用されることが付記されています。唐突な決定と感じられる方もおられたでしょうが、両神学院の関係司教および養成担当者により検討された上での司教団の決定でありました。

この「合同」がいつの時点で実施され、両キャンパスがどのように使用され、どのような養成方針のもと、どのようなスタッフ構成でスタートするか、などについての詳細は、司教団と両神学院養成者の代表メンバーによって構成されている「神学院合同準備会」において、現在検討されています。

司祭の養成は、教会における最も重要な使命のひとつです。教区司祭の養成の責任は、その教区の司教にありますが、それぞれの教区民全員の責任でもあります。しかし、司祭叙階に必要な哲学、神学の習得や共同生活などによる養成は、主に神学院において行われます。神学院在籍中でも、休暇中や休学中の養成の責任の主体は、それぞれの教区にあります。

これまで、日本16教区のうち、九州・沖縄の5教区の神学生養成は、福岡の神学院にて、聖スルピス会に委任され、他の11教区の神学生養成は、東京の神学院にて行われてきました。それが、今回の決定によって、全日本の司教団のもとに、ひとつの神学院、二つのキャンパスでの養成、という体制で行われることになるということです。

二つの神学院の並存という状態は、時代や地域の要請でもあり、それなりに意義あるものでしたし、司祭養成の使命をこれまで曲がりなりにも果たしてまいりました。

しかしながら、二つであるがゆえの短所も指摘されてきましたし、神学院で働く養成者や教授陣の不足、司祭召命の減少などの否定的要素に加えて、日本全国における共通の養成や全司教団の協働によるイニシアチブなどの利点などが、今回の決定を支持する要因となりました。さらに、外国籍の神学生の増加という新しい状況への対応や、司祭の生涯養成や信徒のリーダー養成との協調という点なども加味されていくことでしょう。東京・福岡両神学院の交流は、すでに養成者間レベルで、また共通の教授による講義や神学生レベルでの交流、助祭養成の一部共有など、すでに始まっていますし、多くの実りをいただいております。

もし「改革」という表現をあえて用いるなら、真の改革は、これまでの伝統や経験を活かしつつ、新しい状況に対応、挑戦していくことだと思います。また、その改革は、賢明に熟考され、全教会に公開され、多くの人の意見を伺いながら、「よりよい司祭」が養成されることが意図され、それを目的としています。必要な改革は、「合同」の時を待つまでもなく、随時、考慮・実施されるべきです。

神学院は、今後とも、多くの皆さまのさらなるご意見、ご協力をいただきつつ、その使命を永久に果たしていくことでしょう。

福岡サン・スルピス大神学院　牧山強美

神学校問題は、現在の召命委員会が厳密な意味でかかわっているわけではありませんが、了承を得て、同委員会関連記事とさせていただきました。

生活の中の教会

天神教会　　フォトプラン　山本 富夫

二十年

佐世保港を見下ろす天神の高台に、教会堂は建つ。眼下には米海軍基地があり、港の歴史を思わせる。

この地に信徒が移り住んだのは、昭和初期。上五島からの移住に始まり、黒島、平戸からと続いた。

一九七四年、「天神町祈りの家」が建立され、三浦町教会から巡回した。その後、信徒の増加に伴い、新たに敷地を求め、一九八六年、現教会堂が献堂され、一九九二年には天神小教区として独立した。

「汐入」の交差点に建つ教会堂は、現代建築の麗姿を湛え、復活のキリスト像は、行き交う人々を招いている。